

五 神 か 人 か

先に進む者も後についで續く者も、無言を守り足音を忍んで、崖傳がけづたへに密ひそかな進軍をしてゐた一隊は、闇やみの中にいか嚴めしく取り繞めぐらされた城壁の下に、暫くの間あひだ黒く蠢うごめいてゐたが、やがて一つの黒い影が、音もなくその城壁の中間なかほどに動いたと思ふと、また一つの黒い姿がその裾すそに動きました。後からくと續く黒影こくえい、とみる間まに、それをま

だるしと他に足場をみつめて攀ぢる人影、それらの密かな活動を護るやうに、未明の空は雲低くたれて、去り行く夜に袂をわかつのを躊躇してゐました。

今日やがての戦場となるべき大地は、星影さへもない暗の中に荒涼として、音なく聲なく、冷たく静まりかへつてゐました。程近い敵の砦には、夜となく晝となく、警戒の目が怠らない筈であるのに、この大膽な侵略を少しも知らないものゝやうに静かなのも不思議でした。

こゝまで密かに軍勢を導いたジャンヌの心に謀を合せるやうに、静かにく明けて行く空は、やがてしらくとした朧ろさを、

肅々たる騎士達の上に展のべそめました。

『わが進軍を隠した夜も明けた！ さあ聲高く闘ときを作つて、敵を恐れさせるために、皆々少女みなくをとめについて叫ばれよ！』

ジャンヌは胸を張つて、一聲高くひとこゑ 曉あかつきの空に叫びました。

『神かみと少女をとめ！』

『神と少女！』

一瞬にして破れた静寂の中に、時を合せ、折を逃さぬ喇叭ラツバの聲、太鼓の音は駆け出す兵士の足音を追つて響き、ジャンヌが指揮の聲はその烈はげしい雑音ざつおんの中に鋭く響きました。

『炬火たいまつを——炬火を！ その天幕に火はなを放て！』

戦闘は開始されました。不意の敵襲に驚かされた英兵は、武装もそこくくに人の劔を取り、友の槍を奪つて討つて出で、炎々と燃え上る火を目の前に見ました。まだ暗さを撤し切らぬ空に、はてしもなくひろがり行かうとする火焰、火花は兜を忘れた英兵の頭上に美しくはらくくと降りかかりました。それは血迷つた英兵に、自分達の本營を焼かれるものと誤り信じさせました。戦はぬ先に怖れて逃げ出す兵士を逐つて、復讐の心に充ちくた佛蘭西兵は先へくと突進しました。

『それつ勝利はもはや見えたるぞ！ この機を遁すな、進め！』
聖旗の靡くところにジャンヌの凜々しい聲があり、その旗風に招

がれて佛蘭西人は續きました。そこに劔つるぎと劔の火花が散り、こゝに槍と槍との鎬しのぎが削けづられ、羽虫はむしのやうに飛びちがふ矢は、蹴けあ上がる砂塵さぢんの中にその獲物を探してゐました。

日はのぼつた。輝く黄金の兜の下に、栗毛の髪を編あんで肩に垂れ、二つの頬に血をさしたジャンヌの、不死を信じるものゝやうな働きは、そこにも見え、こゝにも見え、行くところに味方を導き、現はれるところに敵を敗やぶりました。けれどその日の戦闘は、いつ果てようとも見えませんでした。やう／＼不意撃ふいちの驚ききに馴なれ、敗北の耻辱を感じた英軍は、援軍の到着と共に勇氣を回復し、隊伍たいごを整へ直して手強てづよい反撃を試みました。それは小勢こぜいな佛蘭西軍にとつて、

可なりの打撃にみえました。

味方の色めきそめたのを見てとつたジャンヌは、全身を憤激に燃やして、聖旗を打ち振りくひと一しほ烈しく叫ぶのでございまして。

『佛蘭西の強つはもの達よ！こゝを一步も退くな！神かけて味方は勝利なるぞ！それつ進め！神の少女に續けつ！』

飛鳥ひてうの如く駆け行く姿が、群がる敵兵を押し切り蹴倒し、さながら鐵てつの體からだのやうに見えましたが、敵も味方もあれくと見る間に、神のやうに消え、神のやうに現はれ、忽ちるいへきに壘壁もとの下に流れる旗影はたかげを人々は見ました。

用意なはばしこの繩梯子なはばしこを打つて投げ、今や眞つ先てきるゐに敵壘てきるゐに肉迫しようとな

せつたジャンヌは、この時ふと左の肩先に強く觸れた異様な感覺を覺えました。と同時にその體は地上にどうと轉じて倒れました。

一つは悲しみに、一つは喜びに、敵も味方もこの不意に起つた大いなる驚きに支配されました。

眞つ先に驅けつけた騎士のラ・ヒイルは、少女の肩先深く喰ひ入つた一筋の箭と、思ひもうけなかつた神のみ意に、天を仰いで横たはつたジャンヌの悲痛な面持とを見ました。

『おゝ！ 疵は浅うござりまするぞ！』

ラ・ヒイルは、ジャンヌを扶け起して自分の乗馬の背に横たへ、驅けつけた二三の兵士と共に、それを護りながら急いでそこを立ち

退くのでございました。

静かなものかげに移されたジャンヌの、美しい眸ひとみを溢あふれる涙は、時の間に色褪いろあせた頬を傳つたはつて流れました。この堪たへ難がたい疵きずの痛みは、佛蘭西を救ふべき使命を負おつて、たゞ國を思ふの念に一つばいであつたジャンヌの、少しも豫期よきしなかつた出来ごとでございました。燃えるやうな肉の疼痛いたみ、神聖な肌を傷きずけられた處女の怒り、それに一時いちじの落膽らくたんは一層その苦痛を烈しくしました。ジャンヌは暫くの間、少女らしい悲しさに浸ひたつて、心行くばかり聲をあげて泣きたいと思ひました。あまりの烈はげしい疵きずの痛みに、『おゝ神よ！』と思はず叫よばうとした時、ふとジャンヌの心に失はれた信仰よみがへが甦よみがへりました。

『さうだ、それも神のみ意こころならば！』ジャンヌは夢から覺さめたやうにはつと心の眼をひらきました。さうして奮然ふんぜんとして起き上らうとした時、今や自分の疵ほうたいに繃帶ほうたいを巻かうとしてゐるラ・ヒイルをその傍そばに認めました。

『お！ それには及びませぬ。それよりも戦さは今が大事の瀬戸際はやく劍をお取りなさい！ さ一時いつときもはやく戰場へ！』といふよりはやく、力を籠めて箭やを引抜き、自分から無造作にその疵所きずしよにぐる／＼と白布はくふを巻くのでした。『わたしの從者じゆしやよ！ 兵士よ！ 旗を！ 馬を！』

自らの心弱さに懺悔ざんげしたジャンヌは、驚き惑まどつて人々が止めるの

を振り切り、一散いっさんに再び戰場へと馬を驅かけさせました。

『進め、佛蘭西の強つはもの達！ 神は味方を救はせ給ふた！』

再びその聲を聞き、その姿を見ようとは思はなかつた味方も敵も、遙かに後陣から響くその聲と、その聖旗の靡なびくのをまのあたり見ました。神の少女を失つた佛蘭西軍は、その失望の上に敵の新しい攻撃に苦しめられて、次第はげく崩れたつてみた折から、思ひがけないこの聲に勵はげまされて、その聲と神を信じつゝ勢いきほひを盛りかへしました。英軍はまた、確かに射殺いころしたと思つたジャンヌの、この二度の出陣に驚かされて、ジャンヌを神そのものゝやうに怖れる心が、彼等の胸むね々に喰くひ入り、さうして勇氣いくじを挫くじいてしまひました。

その長い時間の戦闘も、傾いてゆく日影と共にやう／＼果てよう
としました。潰走くわいそうして行く英兵の後に、血まみれの死體や棄てられ
た武器が斑まだらとなつて残りました。雲はゆるやかにその遙かな上を流
れて行く。

ヂュノアは一時いつときの惡戰苦闘に疲れた體を、この漸やうやく贏かち得た閑暇ひま
のうちに見出した時、少女ジャンヌとその聖旗の姿が、どこを求め
てもその瞳のうちに入いらないのを發見しました。

あゝ少女は再び失はれたのでせうか？

ジャンヌは、遁にげ行く敵を逐おひ、刃はむか向ふ英兵を蹴散して、丁度引
返すといふことを忘れたものゝやうに、先へ／＼と進んでゐました。

今しも遁にげ後おくれた一人の英兵は、ジャンヌの馬の疾足はやあしに追おひつかれて、絶對絶命いつしよになると一緒に、くるりと後うしろを向むいて殊勝てやりにも手槍てやりをのべて馬の脚あしを突つかうとしました。

『えゝ小癩こしやくな！』とジャンヌは腹たゞしさうに、聖旗の軸でカチリとそれを拂はらひ退のけると、臆病者おそはよろ／＼となつたと思ふ間まに、手槍を投げ捨てゝひたりとそこへ手をついてゐました。

『あゝもし／＼、お待ちなされて下さりませ。これこの通り槍たても楯たても、武器といふ武器をみんな投げ出してお願い申まします。どうぞ生いの命ちばかりはお助け下さりませ。私の爺おやぢは大金持ゆゑち故ゆゑ、倅せがれが捕虜とりことなつたと聞ききましたなら、どんなに澤山たくさんな代償金みのしろぎんでも、快こゝろよく出して

くれませうほどに……。』

『恐怖おそれに心が迷つたか！ お前はもうこの少女が手中のもの、運命がこの手に授けた劔のために、お前の命は貫はなければなりません！』

『お見かけのお優しいにも似ず、恐ろしいことを仰おつしや言ります。あなたも優しい愛らしい御女性ごの御一人、そのお胸にひそむお慈悲じひによつて、どうぞ私いのちめが生命をお助け下さりませ。』

『わたしがつけた鎧の下に、人の情なさけはひそみませぬぞ！』

『どのやうな國でも世界でも、誰でもが従ひます愛の名によつて、どうぞお許し下さりませ。國には丁度ちやうど、あなたと同じ年位の妹が、

年老つた母親と一緒に、今日か明日かと私めが歸るのを待つて居ります。もし、あなただとしてお國元には、御兩親もお姉妹もおありなさりませう。』

ジャンヌはこの時奮然として言ひました。

『おゝ！ その言葉は却てわたしを怒らすばかりと知らぬか！ お前達のために、どんなにこの佛蘭西の母は子を失ひ、子供は父を失くしたであらう！ その通り英吉利國の親達にも、同じ嘆きを知らせてやらなければなりません。何年が間といふもの、佛蘭西人ばかりが堪へた涙を、英吉利人にも思ひ知らせてやるのです。豊かな佛蘭西の畠を踏み荒し、平和な家に恐ろしい火を放たうために、神が

國と國との境に置かれた海を渡つて、はる／＼と死に／＼來た愚か者
め！佛蘭西人はたゞ一人としてお前達が奴隸どれいとはなりませぬぞ、さ
あ劔つるぎをおとり、楯をおとり！ 尋常じんじやうに勝負しませうぞ！』

ジャンヌが英人えいじんに對する憎みと怒りは強く、とう／＼その英兵を
斃たほしてしまひました。

『あゝ力よ！ 情なさけを知らぬこの怒りよ！』

ジャンヌは劔をひっさげたまゝ、この心はわが心か、この力はわ
が腕の力かと、暫くは茫然ほんやりとしてそこに立つて居りました。

『やい、女、お前が最後の時は來たぞ。此處こゝで會あつたは天あの與たへ、
さあ、もとの地獄へ歸り居れ！』

その聲にジャンヌは我にかへつて、ふと振り向いてみると、兜や頬ほ當あてに顔かを隠かくし、美しい騎士の装よそほひをした一人の武士ぶしが、劔けんをふり翳かざしてその後ごに迫せまつてみました。

『おゝまたしても不幸な運命を、少女あしもとが足下あしもとに投げ出さうとてな！』と、踵きびすをかへしてぢり／＼と寄つて來たジャンヌは、英吉利人と思ひの外ほか、わが同胞はらからの佛蘭西人であるばかりか、どことなく面影おもかげのシヤルルに似た、氣品の高い人の姿に、劔けんを振りあげようとした腕うでの力が、思はずたるんでしまひました。

『やあ卑怯者、お前が命を貰ふには、このブルゴンディ公の劔けんは少し勿體もったいないわ！』

この言葉を聞くより早く、ジャンヌはひらりと馬を飛び下りま
した。

『ではやはり、貴君あなたはブルゴンデイ公でいらせられましたか。』

『おゝその察しに違はず、我れこそはブルゴンデイのフィリップで
あるぞ、お前が魔法も、わしに向つてはなんの役にも立たぬと見え
るわい、それもさうであらう、今までお前が敗つたのは、みんな取
るに足らぬ端武者はむしやどもさ、さあ眞しんの男子をとこと一勝負ひとしやうぶしようか。』とブル
ゴンデイ公が身構みかまへた時、ジャンヌの行衛ゆくゑを探してゐたデュノアが、
この有様ありさまをみつけて馬を飛ばして驅かけて來ました。

『お待ちなさい、ブルゴンデイ侯爵、その劔つるぎは私が引受け申しま

せう、聖きよき少女を保護するこの胸の堅かたさを、まづその切つ先に試みられよ。』

『恥はぢよ！ 女の助けを借りる卑怯者、武勇の譽ほまれを魔術に汚けがし、その魔法使ひの妖婦えうふの楯に胸を貸かさうとは、さてく恥ぢを知らぬ人にん非人びにんぢやわい、さあ来い！ 地獄の助けを借りる奴等やつらは、天の護まもりに見はなされるぞ。』

兩雄りやうゆうはあはや戦たたかはうとしました。ジャンヌは慌あわてゝその中に割つて入り、『暫しばらくお待ちなさいませ。さあ公爵にはあちらへ、デュノア殿はこちらへ、佛蘭西人同志が、血潮ちしほを流してはなりません。まゝ、お離れ下さいませ。そこにしつかとお立ち下さいませ。』と甲斐甲かひが

斐しく二人をなだめてブルゴンディ公に向ひ、『公爵、暫くの間わたくしが言葉に耳をお貸し下さいませ。熱いく血を流して、まゝ何者を倒さうとなさるのでございますか？公爵には貴い佛蘭西の皇子で渡らせられるやうに、これなるお方も亦、貴い佛蘭西のお裔でございませぬ。このやうなことを申しますわたしも、やはり佛蘭西人の娘でございませぬ。私どもの腕は貴君を抱き、その膝は貴君の前に跪かうと、仕度をして居るのでございませぬ。又私どもの劔は、貴君を害はうために鑄られたものでもございませぬ。かうして敵味方に分れ、恐ろしげな鎧兜に身を固めて居りましても、心の中では、どこやら陛下におん面影の似かよひ遊ばしたお方を、尊び申して居

るのでございます。』

『やあ媚こびを餌えさにしてわしを誘さそはうとするか。その甘言かんげんにまどはされるやうな、腑甲斐ふがひない心は持たぬぞよ、さあ言葉を棄すて武器をとれ！』

『このやうに跪ひざまづいて、お勸めすいいたしますのを、公爵には私一人のためと思召おほしめすのでございますか。ご覧なさいませ、英吉利軍イギリスぐんはもうすつかり追ひ拂はらはれて、残るものはたゞ屍體しかばねばかりでございます。あれお聞きなさいませ。勝利の喇叭ラッパは勇しく佛蘭西軍から響いてまゐります。神は正義の佛蘭西に味方なさるのでございます。さあ公爵、貴方あなたの迷ひをおさましたさいませ、怒りを和やはらげて、温い佛蘭西人の

手を握らうと遊ばしませ。神は過ぎ去つた罪を問ひ給はぬでございませう。天の使者つかひのこの少女をとめは今、貴方を正義さしやに導けと囁かれて居ります。佛蘭西人が戦ふ理由は、これこの旗の色のやうに、鮮明あざやかなものでございますぞ。』

『よくもく言葉巧みに言やるわい、悪魔が女の言葉を借りての正義よばはり、えいっ煩い！ もう聞く耳は持たぬわ！』

『公爵はたびく私を魔法使ひと仰言いますが、平和を植ゑ、憎悪の念をぬぐひ去らうとするのが、悪魔の業でございませうか。和合や親睦と申しますものが、地獄の淵から湧いてくるものでございませうか。國家のために命を抛ち、力限りに戦ふのが、人の道に背く

ものでございましたなら、どんなものこそがこの世の中に正しいこととでございませう？ 神が正義を無視する時に、悪魔が却てこれを保護するわけがございませうか？このやうなことを申します私の言葉が、もしも正しいものでございましたなら、それはみんな天の授けに外ならないのでございます。』

ジャンヌの熱心は面に溢れて居りました。もとより貧しく生れた農夫の娘が、字の一字習つたこともなければ、深い智識があるわけでもありませんのに、その言ふところは悉く、ブルゴンディ公の良心に深く喰ひ入るのでした。ジャンヌの美しい貌には血がのぼり、その眼は眞實に輝いて、公爵の心を射るのでございました。

『おゝ、どうしたことぢや、わしが胸の底に、不思議な心が湧わきを
るわい！ 反抗することの出来ない力が………』

公爵は非常な感激を、一つどころに定めたその目のうちに現はし
て居りました。

『おゝ公爵の心は動かされました！ おゝ神様！ わたしの願ねがひは役やく
だちました、怒りの雲は涙に消え、平和の色はあのおん眼から輝き
ます。武器をお捨てなさいませ！ あゝ公爵には再び佛蘭西の味方
となられました！』

ジャンヌは劔つるぎと旗を投げすてゝ、天地てんちにひろがれよとばかり、そ
の両りやうの手を擴ひろげて嬉うれしさに叫こびました。

この大いなる喜びを嘉よして、静かにく昏くれて行く天そらに、佛蘭西の軍營ぐんえいから吹き出す喇叭ラッパは、勇ましく勝利の休戦を告げて居りました。

目次に戻る

【入力者注】(頁・行は底本のもの)

- 86-7 この大膽だいたんな侵略しんりやくを ↓ この大膽だいたんな侵略しんりやくを
- 89-2 槍やりと槍やりとの鎬しのぎが削られ、 ↓ 槍やりと槍やりとの鎬しのぎが削られ、
- 94-4 その聖旗なびの靡なびくのを ↓ その聖旗なびの靡なびくのを
- 95-5 この漸やうやく贏かち得た ↓ この漸やうやく贏かち得た
- 96-2 になると一諸いつしよに、 ↓ になると一諸いつしよに、
- 98-1 母親いっしよと一諸いつしよに、 ↓ 母親いっしよと一諸いつしよに、
- 102-4 楯かに胸かを借かさうとは、 ↓ 楯かに胸かを貸かさうとは、
- 104-6 英吉利軍エギリスぐんはもう ↓ 英吉利軍エギリスぐんはもう

公開：令和三(2021)年八月二四日

改訂：令和五(2023)年三月七日